秋　田　市

上新城中学校遺跡

— 学校改築に伴う緊急発掘調査概報 —

1991.3　秋田市教育委員会

序

上新城地区は秋田市遺跡詳細分布調査報告書をみると秋田市でも遺跡分布密度の高い地域の一つであります。特に上新城中学校を中心とした範囲は縄文時代から古代までの遺跡が多く、早くから注目されている所です。

今年度の調査は昭和63年度に引き続き実施された上新城中学校改築に伴う事前発掘調査で、一昨年発見された縄文時代晩期の楕円形の溝跡の続きが検出され、また26基の土壙墓も発見されております。

遺跡の全容は来年度の調査を待たなければなりませんが、この調査の実施にあたり学校、地元関係者の積極的なご協力をいただき深く感謝いたしております。

とりあえず、概報にまとめましたので、研究資料として広く活用され、また文化財保護の一助となれば幸甚に存じます。

平成３年３月

秋田市教育委員会

文化振興課長

楢　岡　　一

目　次

序
調査に至るまでの経過……1
調査期間と体制……1
調査の方法と経過……1
遺跡の位置と立地……3
発見遺構と出土遺物……6
まとめ……18

例　言

1．本概報は秋田市上新城五十丁字小林190の１に所在する上新城中学校遺跡の発掘調査概報である。
2．本概報の執筆、編集は石郷岡誠一、納谷信広がおこなった。
3．遺跡の位置と立地は、「上新城中学校遺跡とその周辺遺跡」（1973　秋田市教育委員会）の遺跡と環境の文章を利用し、調査区層序を付け加えた。
4．遺構の平面図、土層断面図中のＰは土器（片）、Ｓは石（礫）を示す。石器実測図の石鏃の外形図にはアスファルトの付着箇所をそれぞれ示した。
5．発掘調査による出土遺物、実測図、写真、その他は秋田市教育委員会が保管する。

調査に至るまでの経過

上新城中学校遺跡は、上新城中学校敷地を中心とした段丘上に位置し、早くから縄文時代晩期を主とした集落遺跡として知られ、これまでも林道工事、小グランド造成工事等に伴い発掘調査が実施されてきた。

平成２年度の発掘調査は、老朽化した中学校舎の改築に伴い、昭和63年度に実施された前庭部の発掘調査につづき、旧体育館跡地の発掘調査を実施する事となった。調査区は昭和63年度調査区の北東部にあたる。

調査期間と体制

調 査 期 間　平成２年４月16日～６月14日
調査主体者　秋田市教育委員会
調査担当者　秋田市教育委員会
調　査　員　菅原俊行　石郷岡誠一　納谷信広
調査補佐員　五十嵐芳郎
調査作業員　泉金悦　佐藤和一郎　藤原アイ子　徳山京子　佐藤トシ子　鎌田克子　佐藤スズ
　　藤原アキ　佐田孝子　佐藤イト子　佐藤タカ子　大渕真理子　佐藤芳枝　泉ひめ子

調査の方法

昭和63年度校舎前庭部発掘調査において設定した任意の原点より、東西南北（磁北）に基準線を作り、63年度発掘調査区にあわせ、大グリッド（40m×40m）を設定し、さらにその中に小グリッド（４m×４m）を設定し、単位グリッドとした。大グリッドは（１～15）、小グリッドは東西（X軸）に数字（１～10）、南北（Y軸）にアルファベット（A～J）を配し、その組合せで遺跡名（KE）、大グリッド番号、小グリッドの順に呼称することとした。すなわち昭和63年度の調査区からは一連の呼称となる。

調査経過

４月16日、グリッドの設定を行い、南側より表土剝ぎを実施し、併せて精査をすすめていく。（～５月10日）なお、４月23日、24日には重機を用いた表土剝ぎを実施する。地山は南北で状態が分かれ、南側が砂礫層、北側がローム層となる。表土層内出土遺物は縄文土器小破片（晩期大洞C」

第1図　遺跡の位置

～A主体）、石器、須恵器数点である。遺構は土壙、溝が検出される。特に５月８日に検出されたグリッド西北隅から北東方向に弧を描いて延びる幅約30cmの溝が検出され、位置的に昭和63年度の中学校舎南側の発掘調査により検出された溝の続きではないかと考えられた。（１号溝跡）また、旧校舎基礎、前回調査トレンチも確認された。

５月11日より、それまでも一部並行して実施していた精査を改めて全面的に実施し、併せて旧校舎基礎の掘り上げを実施する。その結果、５月22日、発掘区北東隅に土壙墓群が確認される。

５月23日より遺構の断割りを行い、順次、写真撮影及び断面図の作成を実施する。土壙からは一部、縄文土器の出土が認められた。北側に確認された土壙墓は上部の削平が激しく深さは約20cm程度であり、ベンガラ、玉類の出土が認められた。また１号溝跡の底部に細長いピットが連続して検出され、柱穴の可能性も考えられた。

５月30日、北側の土壙墓群の広がりを確認するため北側及び東側への拡張を実施し、さらに数基の土壙墓が確認された。併せて遣り方の設定を行った。

６月６日より平面実測を行い、終了後、全景写真撮影、６月13日に地形測量を行い、６月14日、機材を撤収し調査を終了した。

遺跡の位置と立地

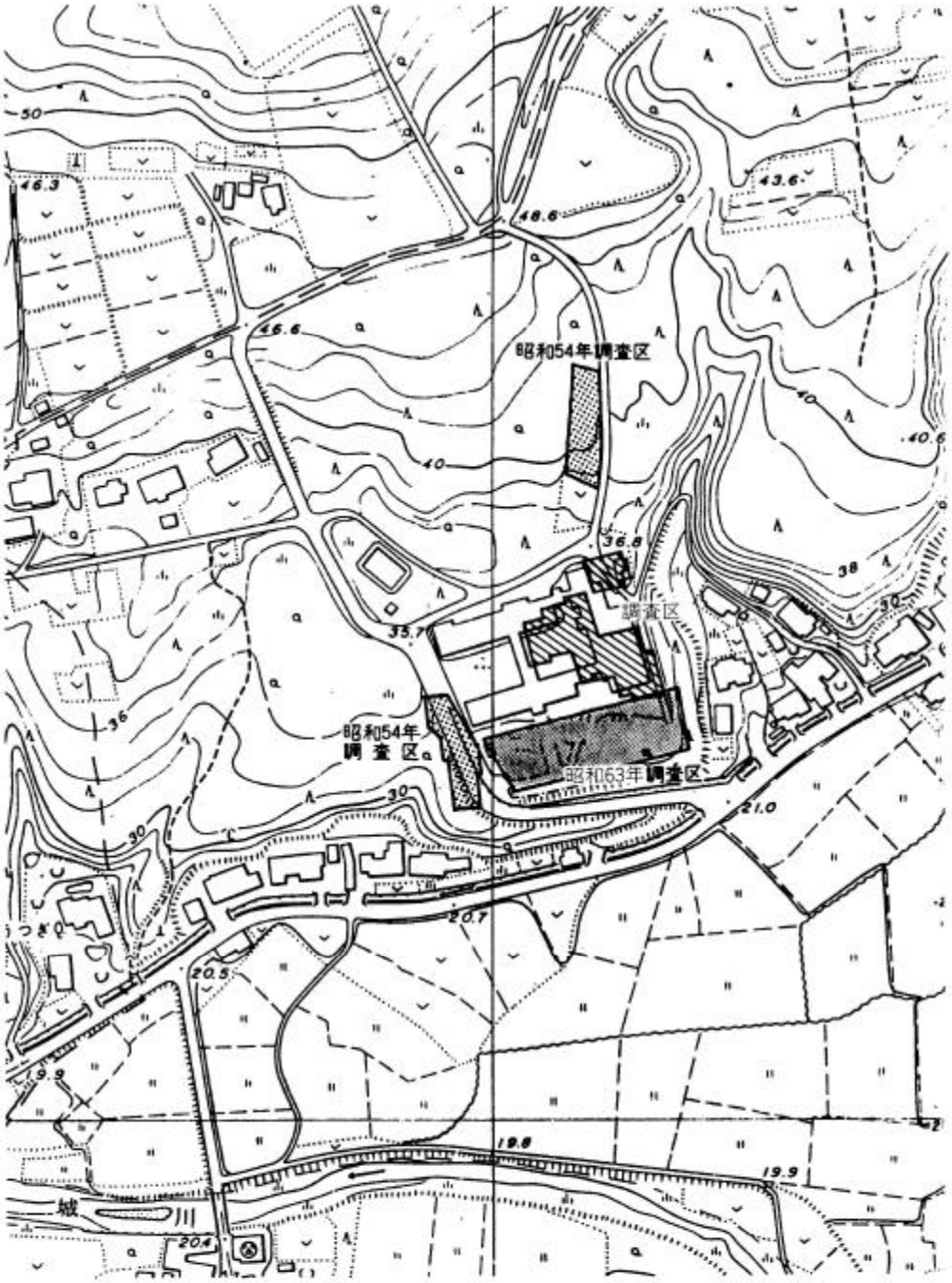
遺跡の位置

上新城中学校遺跡（秋田市遺跡詳細分布調査報告書ＮＯ119）は秋田市上新城五十丁字小林にあり、上新城中学校を中心とした一帯である。秋田市街から北へ直線距離にして約９kmの地点で、秋田から土崎を通り、飯島字長野、飯田を経て、秋田中央交通バス停留所「上新城中学校前」の斜面の道路を登りきった標高約35m前後の南面する段丘上に存在する。

遺跡付近の地形

上新城地区は太平山塊に源を発し日本海に注ぐ長さ約20kmの新城川の上流部に位置し、新城川とその支流の愛染川との細長く二分した谷底平野と、それを挟むように分布する丘陵から成る。

この上新城丘陵は標高60～200mのかなり開析を受けた地形であり、この丘陵の末端を南西に流れる新城川沿いには数段の段丘がみられる。五十丁集落付近には上下２段みられ、上段[注1]は開析を受けた標高60～65m、下段は40～50mで、約10mの比較的急な斜面で上段と区別される。しかし、空中写真と地形図から判断すると、杉崎付近から五十丁集落にかけては少なくても上下３段の段丘が確認でき、前述の上下２段の段丘のほかに標高20～30mの段丘が認められる。



第２図　遺跡周辺の地形

遺跡付近の地質、土壌

遺跡付近の丘陵並びに段丘を構成する地層は、基盤は新第３系中新世船川層で、その上[注2]には暗灰～灰色泥岩およびシルト岩から成る天徳寺層が覆っている。天徳寺層を覆うのは笹岡層で下部はシルト岩ないし砂質シルト岩で上方に漸次砂質化し、上部は微細粒の砂岩になる。この鮮新世笹岡層の上には寒風火山の噴出によるといわれる黄褐色の粘土質火山灰土が堆積し、最上位には亜円礫が混入する黒色土が覆っている。これはいわゆる高岡２統で、黒色の色調はそれほど強くない。一次鉱物を見ると火山ガラスが混入しており、火山灰が関係しているものと推定される。現水田面はシルト主体の沖積層（西山統）である。

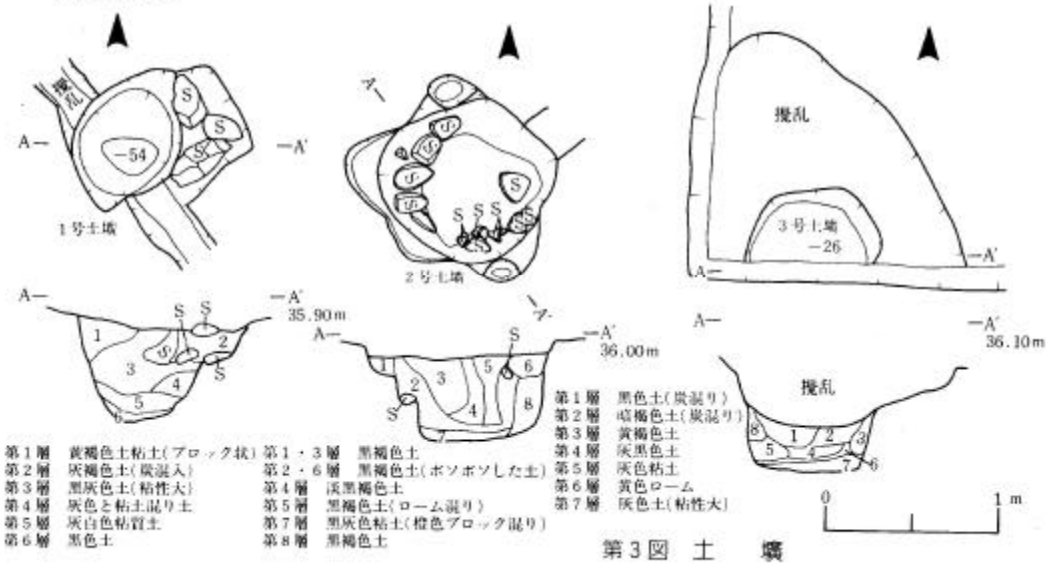
調査における層序は第１層が表土、第２層が体育館造成時に丘陵上部より削り出したと考えられる黄色粘土による盛土層、第３層が旧表土と考えられる暗褐色土層であり、遺物包含層でもある。第４層が発掘区北部が黄色粘土層、南部が砂礫層であり、地山層である。

(注1)　国土庁（土地分類調査）秋田（５万分の１）経済企画庁1966年

(注2)　同　上

発見遺構と出土遺物

発見遺構



第3図　土　壙

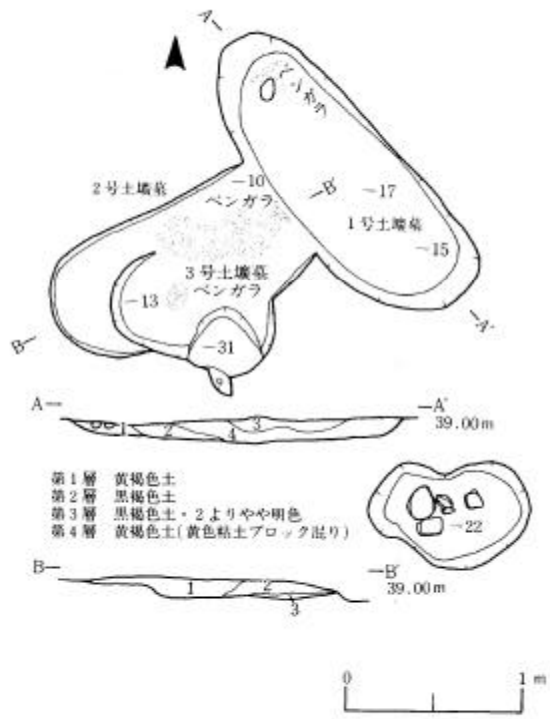
1号溝跡（第5図、図版1・2）

調査区中央部で検出された西南から北東に走る溝で、昭和63年度調査で検出された溝跡の続きと思われる。長さ約18.7m、幅約30cm、確認面からの深さは20〜25cmでゆるい弧状を呈する。東側は削平されており確認できなかった。溝底部には約40cm間隔でピットが認められ、西側ではピット内、ピット間に径10cm〜20cmの礫が突き込まれた状態で検出され、柱の根固めの礫と思われる。

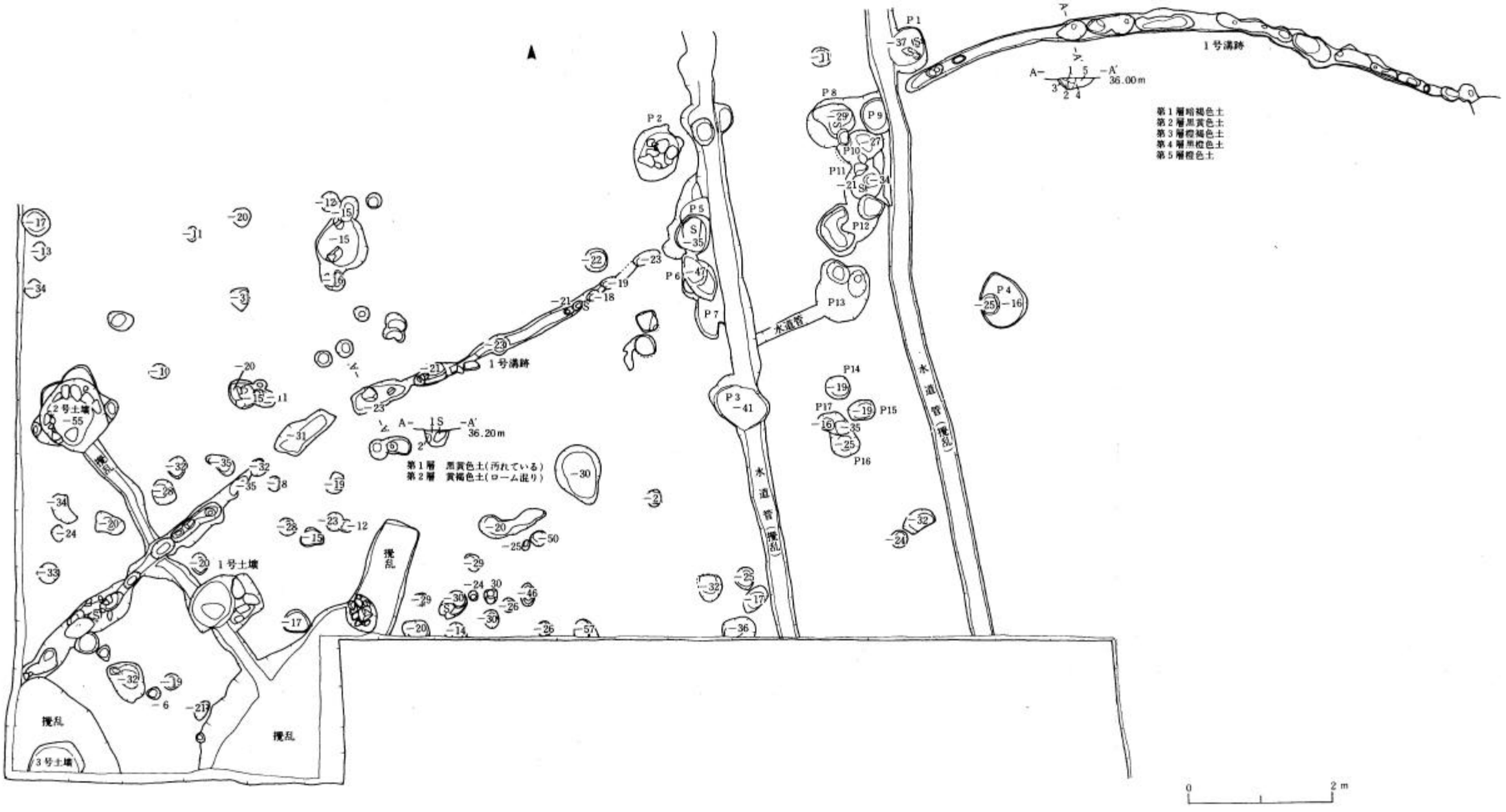
溝は中央部で4m程途切れている。この範囲はピットが多く検出され、中には柱痕跡の認められるものもあり、溝が途切れることと考え合わせると出入口施設の存在が考えられる。

ピット群（第6図、図版1・2）

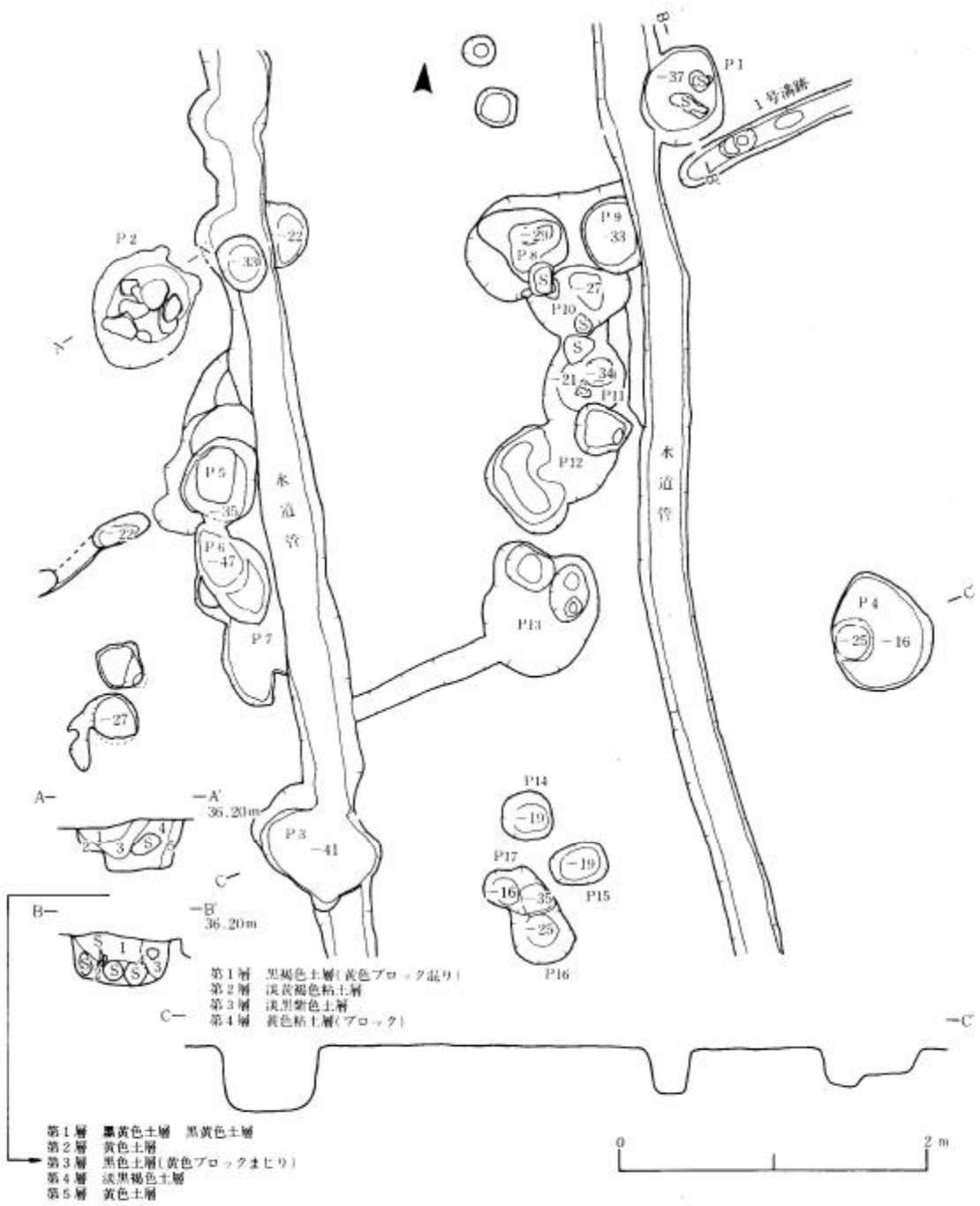
1号溝が途切れる中央部で多数のピットが検出された。プランは円形で径50〜60cm、深さ40



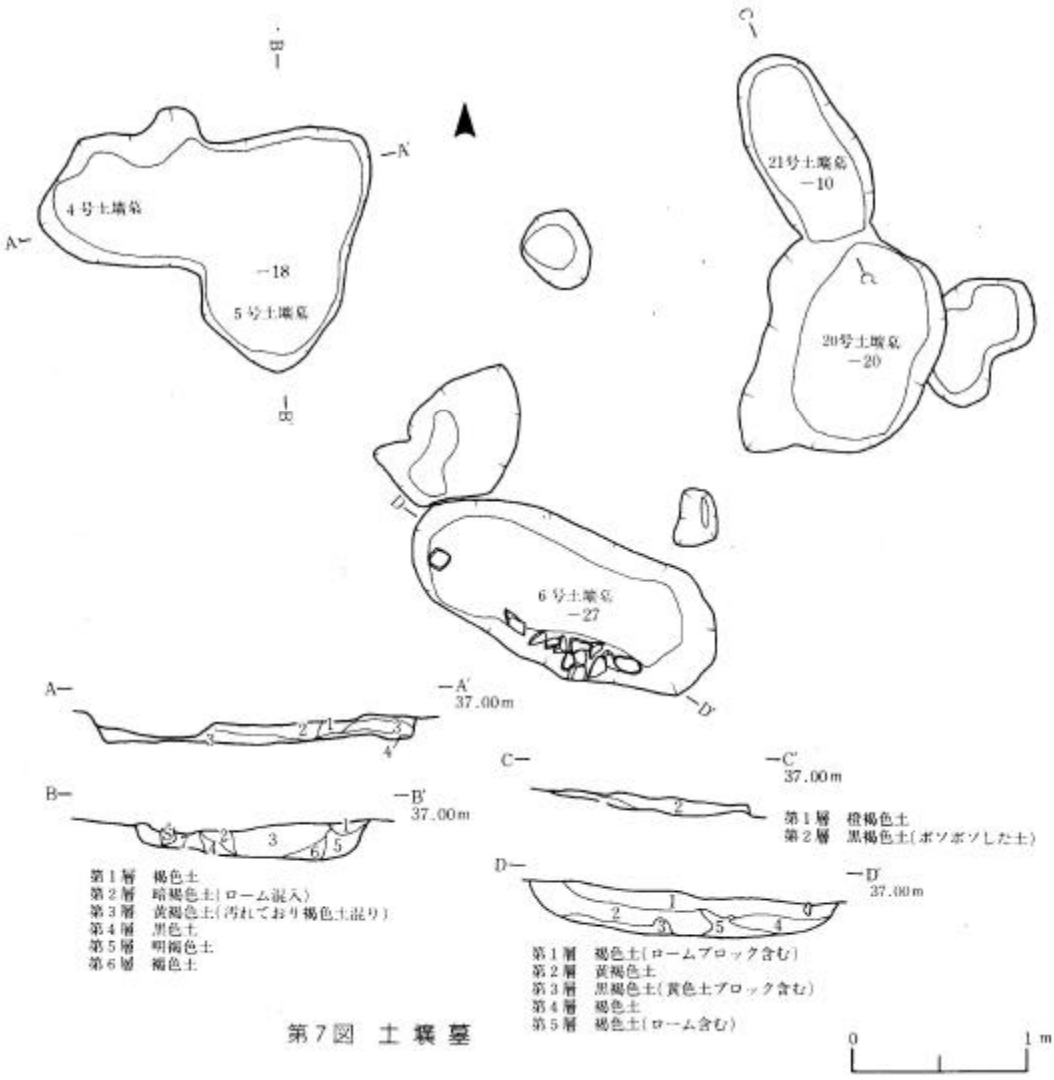
第4図　土壙墓



第5図　北西部遺構配置図


P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
P13
P14
P15
P16
P17
水道管
1号溝跡
A
A'
36.21m
B
B'
36.20m
C
C'
第1層　黒褐色土層(黄色ブロック混り)
第2層　淡黄褐色粘土層
第3層　淡黒褐色土層
第4層　黄色粘土層(ブロック)
第1層　黒黄色土層　黒黄色土層
第2層　黄色土層
第3層　黒色土層(黄色ブロックまじり)
第4層　淡黒褐色土層
第5層　黄色土層
0
2 m

第6図　ピット群



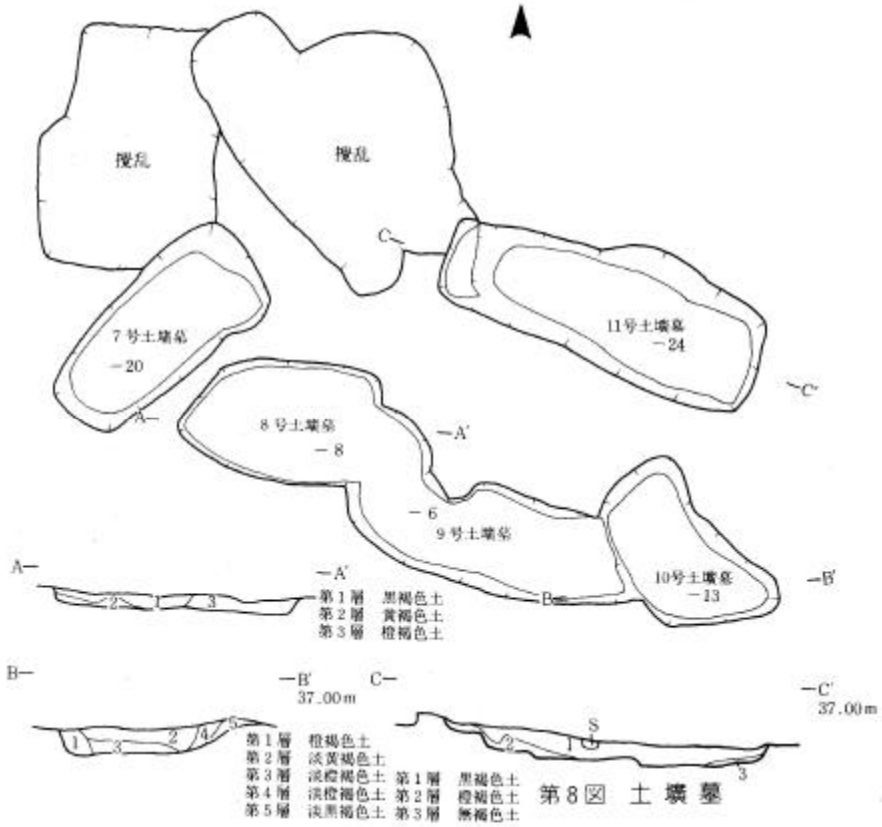
第7図　土壙墓

～45cmのものが多く、中には明瞭に柱痕跡の認められるものもあり、柱穴と思われる。また配置が建物を推定させる。

土壙墓（第4・7～10、図版3・4）

調査区北東部で26基検出された。プランは楕円形を呈し、規模は長軸194cm、短軸116cm、深さ41cmのものが最大で、平均すると長軸132cm、短軸52cm、深さ18.5cmを測る。長軸方向はN14° Wから N84° Wの範囲に入るものが17基、N18° EからN88° Eの範囲のものが9基であり北西方向を示すものが多い。

26基のうちベンガラの認められるものが3基（1、2、3号土壙墓）、位置は3号土壙墓が北西部、2号土壙墓が西南部であり頭位が推定できる。



第8図 土壙墓

上新城中学校遺跡土壙墓一覧表

土壙墓番号	壙口部(cm) 長軸	壙口部(cm) 短軸	壙底部(cm) 長軸	壙底部(cm) 短軸	深さ(cm)	平面形	ベンガラの有無と散布場所	頭位	長軸方向	出土遺物	備考等
1	194	73	163	64	13	楕円形	有(北東)	北西	N41°W		
2	140	76	△140	69	12	楕円形	有(中央)	西南	N59°E		
3	95	△ 55	86	△ 55	13	楕円形	有(北西)	北西	N75°W		
4	192	76	175	52	14	楕円形	無		N68°E		
5	141	82	125	70	18	楕円形	無		N20°E		
6	186	81	154	50	23	楕円形	無		N70°W		
7	137	60	110	47	20	楕円形	無		N46°E		
8	98	70	94	64	8	楕円形	無		N84°W		
9	△100	56	△100	45	10	楕円形	無		N78°W		
10	104	92	△ 53	△ 45	12	楕円形	無		N33°W	勾玉、小玉	
11	188	58	152	42	12	楕円形	無		N73°W		
12	132	76	98	53	29	楕円形	無		N55°W		
13	△124	86	△106	70	24	楕円形	無		N79°E		
14	△130	△ 60			27	楕円形	無		N14°W		
15	96	62	72	48	16	楕円形	無		N70°W		
16	△128	67	118	42	41	楕円形	無		N40°W		
17	146	44	130	35	16	楕円形	無		N45°W		
18	△100	72	△ 90	54	24	楕円形	無		N88°E		
19	△110	52	△100	38	14	楕円形	無		N46°W		
20	124	98	112	66	20	楕円形	無		N18°E		
21	△110	58	△104	44	8	楕円形	無		N21°W		
22	94	55	60	58	12	楕円形	無		N51°E		
23	151	116	102	58	33	楕円形	無		N33°E		
24	146	73	116	50	22	楕円形	無		N68°W		
25	134	78	119	48	19	楕円形	無		N62°W		
26	138	70	68	33	18	楕円形	無		N79°W		

(△ 推定の規模もしくは以上を示す)

出土遺物は10号土壙墓から小玉、勾玉が出土している。

土壙

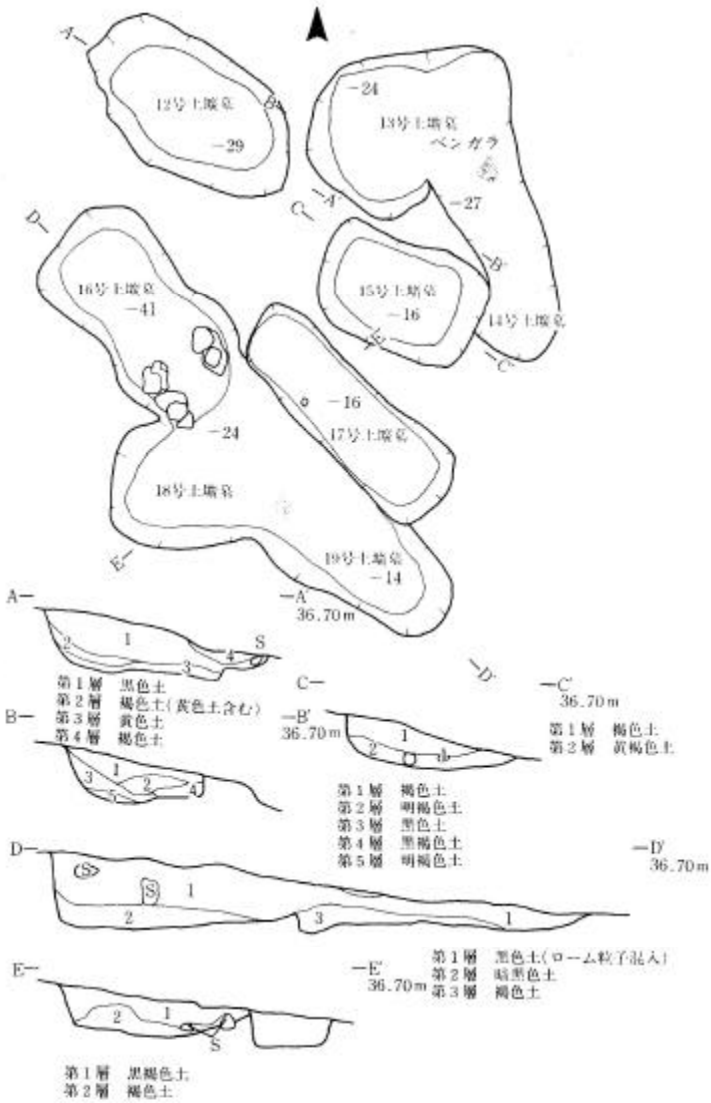
1号土壙（第3図、図版5）

調査区中央西側で検出された。プランは径約60cmの円形を呈するが、東側に長さ40cm、深さ20cmの浅い掘り込みがあり、段がつき20～35cm程の礫が入っている。確認面からの深さは約54cmで壁は斜めに立ちあがる。覆土は6層に分けられ、1層は黄褐色を主体とした粘質土、2～6層は黒色、灰黒色の粘質土である。

2号土壙（第3図、図版5）

調査区中央西側で検出された。プランは径約90cmの円形を呈し、確認面からの深さは55cmである。壁はほぼ垂直に立ちあがり、断面形は鍋状を呈する。覆土は8層に分けられ、黒褐色、灰黒色が主であり、ローム混り土の層がある。

土壙内の南、西壁に10～20cmの礫が認められる。



第9図 土壙墓

3号土壙（第3図、図版5）

調査区中央西北隅で検出された。上部は攪乱。南側は調査区外のため不明である。推定プランは径74cmの円形を呈し、確認面からの深さは26cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、断面形は鍋状を呈する。覆土は6層に分けられ、黒色土、暗褐色土、黄褐色土、灰黒色土などが堆積している。

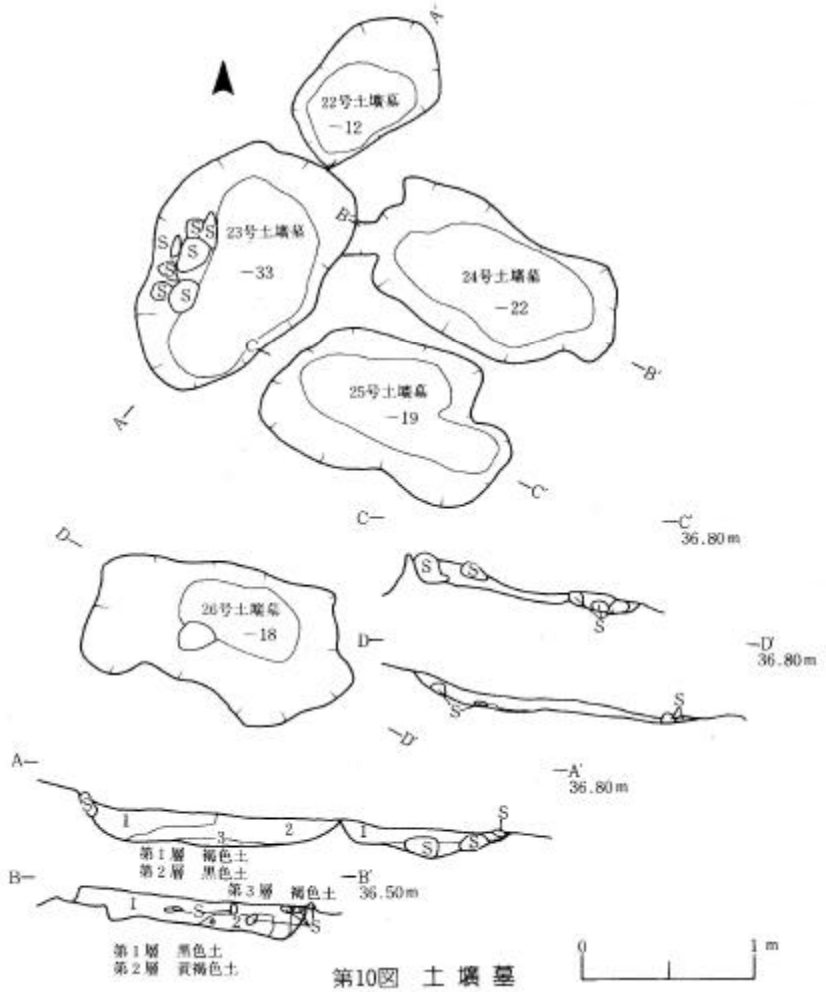
出土遺物

土器、土製品、石器等が出土している。

土器

遺構内出土土器（第11図、図版６）

遺構内出土土器は全て土壙覆土の出土である。１～３は大洞ＢＣ式の鉢形土器、４～６は大洞C_1式、７は大洞Ａ式土器である。８は溝周辺ピット群１号ピット覆土上層からほぼ完形で出土した大洞C_1式の小型壷形土器であり、ほぼ全面にベンガラを塗布し内面には漆状の被膜が認められる。

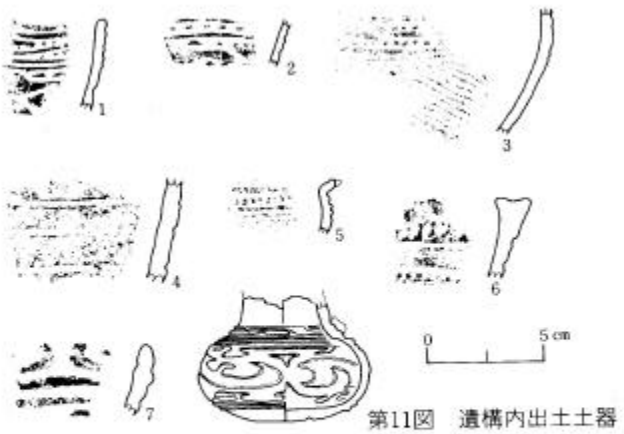


第10図　土壙墓

遺構外出土土器（第12・13図、図版６・７）

大洞C_1～Ａ式土器を中心とした縄文時代晩期の土器及び須恵器が出土している。

図12の９～31は大洞C_1式土器、32～37は大洞C_2式土器、38～45が大洞Ａ式土器であると考えられる。器種は鉢が主体であり９，15，16は深鉢、26は口、34，35は浅鉢である。46は大洞C_2式の浅鉢と考えられる。47は須恵器の蓋である。



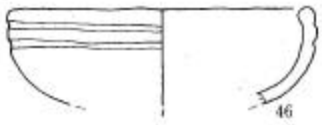
第11図　遺構内出土土器

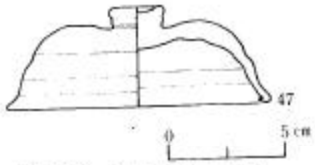
第12図　遺構外出土土器

石器及び石製品

遺構内出土石器（第14図、図版８）

石鏃（１～５）、掻器状石器（６，７）、磨製石斧（８）が出土している。１～３の石鏃は１号溝覆土出土であり、１及び３の基部にはアスファルトが付着している。





第13図　遺構外出土土器

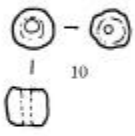
遺構内出土石製品（第15図、図版８）

10号土壙墓覆土出土の石製品であり、９は勾玉、10は小玉である。

第14図　遺構内出土石器

遺構外出土石器（第16・17・18図、図版８）

石鏃（11～16）、石錐（17）、石匙（18～19）、箆状石器（20～21）、掻器状石器（23）、磨製石器（24～25）、くぼみ石（26～28　32）、磨石（29～31）、石皿（33）、石刀（34）、石棒（35）等が出土している。

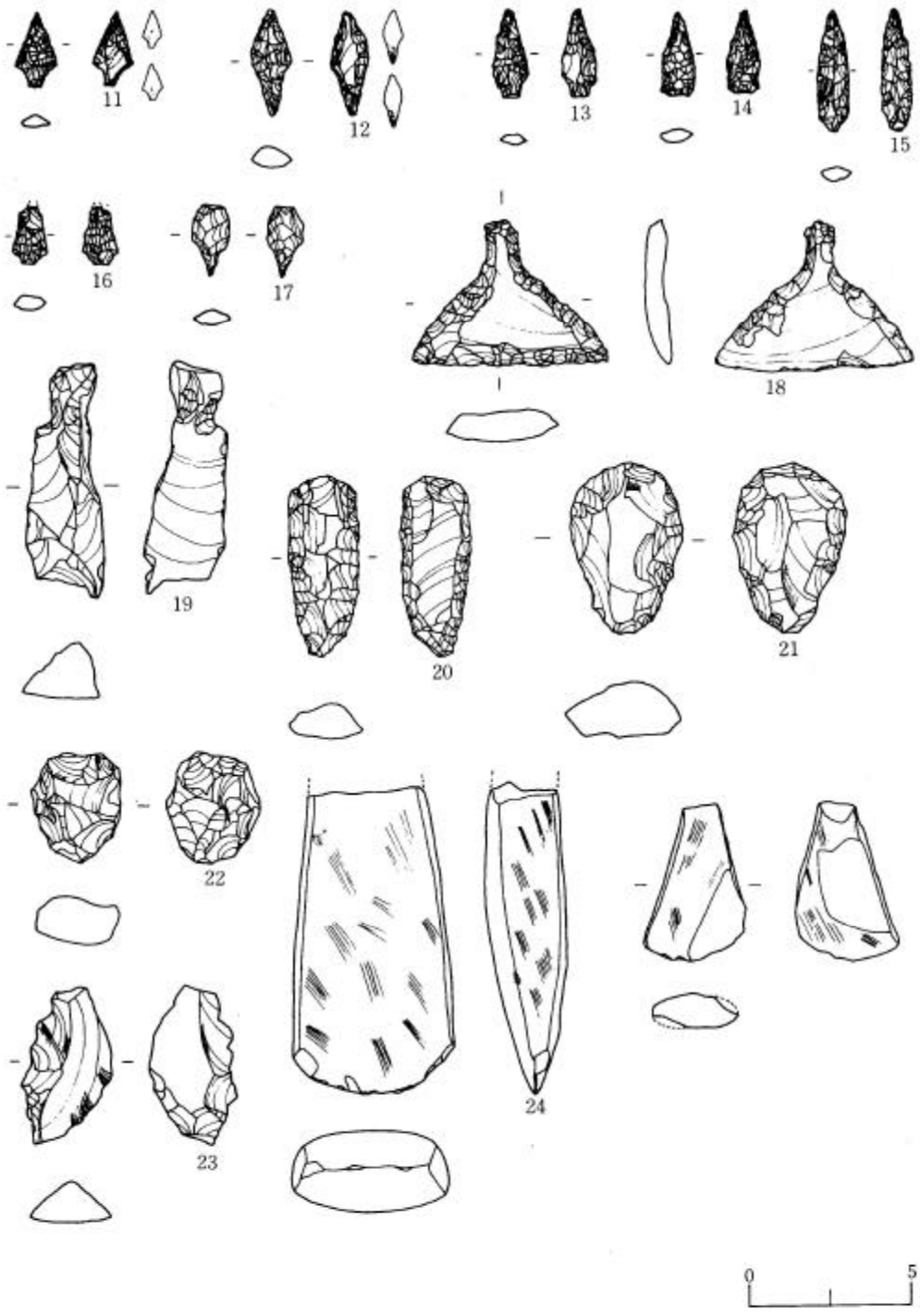


第15図　遺構内出土石製品

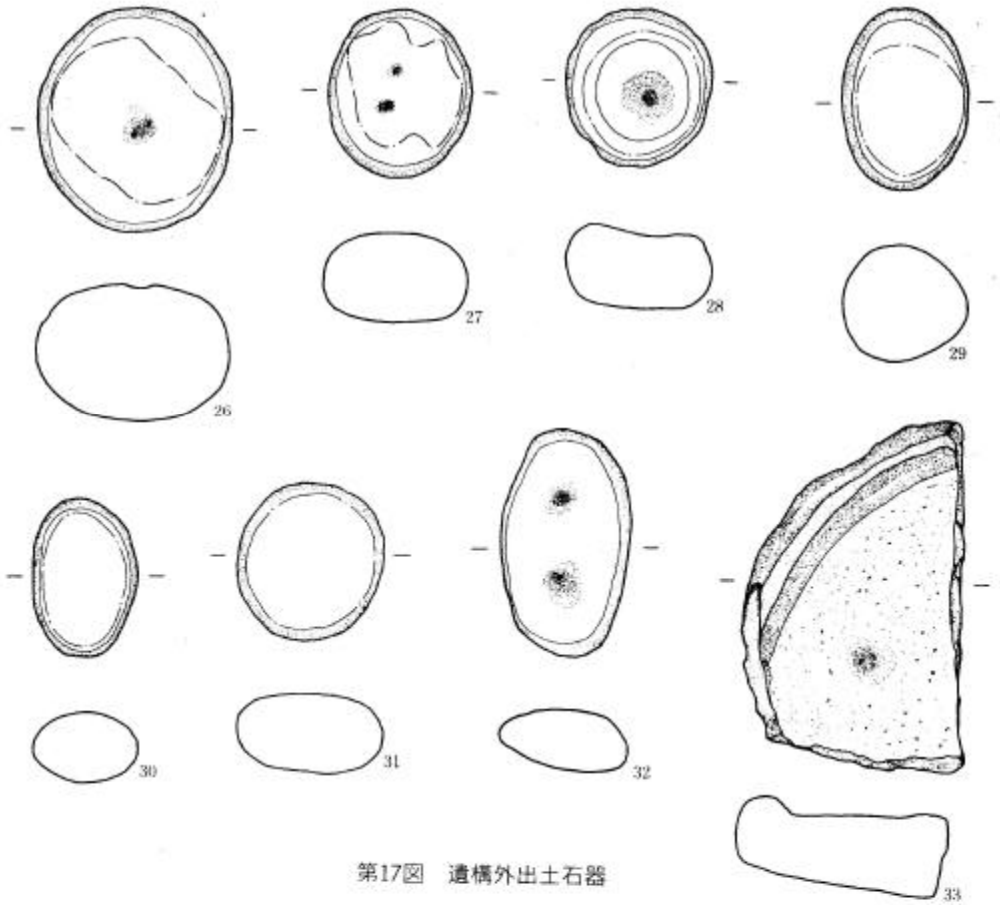
土製品

遺構外出土土製品（第19図、図版６）

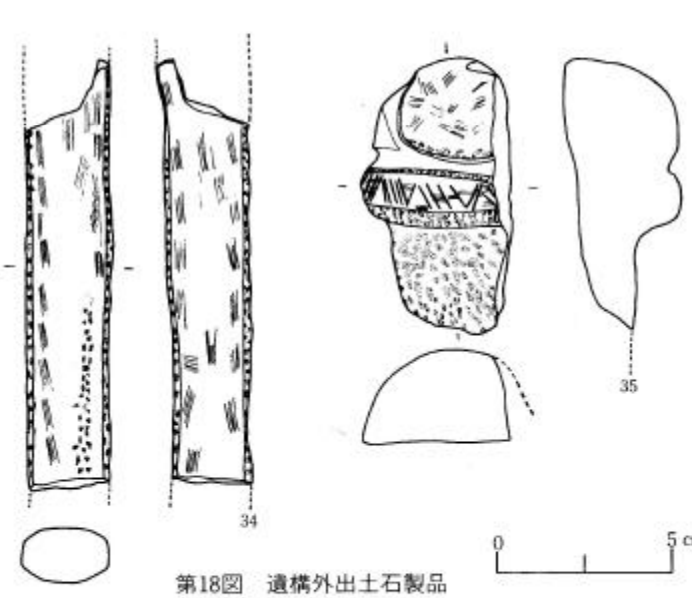
土偶足部（１～３）、有孔土製品（４）等が出土している。



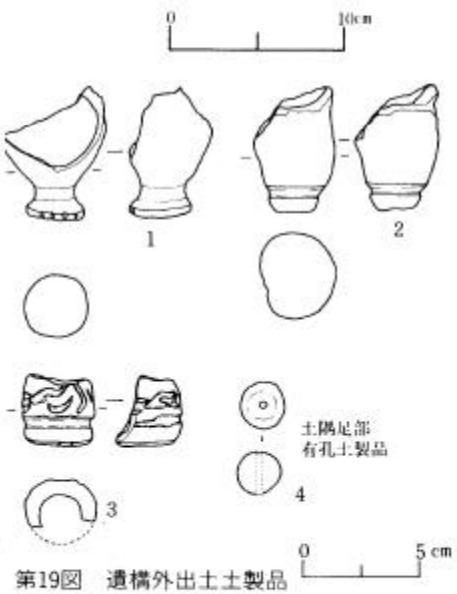
第16図　遺構外出土石器



第17図　遺構外出土石器



第18図　遺構外出土石製品



第19図　遺構外出土土製品

まとめ

上新城中学校遺跡は、昭和29年４月、中学校を建設する際に縄文時代晩期の遺物が出土したことで知られ、翌30年に一部発掘調査が実施され組石遺構が確認されている。その後、昭和54年には校舎西側の林道工事に伴う調査（Ａ地区）が実施され縄文時代晩期の集石遺構、土壙墓20基、土壙４基が検出され、同年９～11月には校舎北側の小グランド造成に伴う調査（Ｂ地区）が行われ、土壙墓74基が検出されている。

今年度の調査対象区は旧体育館の跡地で、前年度調査区の北東区にあたる。調査の結果、溝跡２条、土壙墓26基、ピット群等が検出された。出土土器は大洞C_1～Ａ式が主体である。

１号溝跡は昭和63年度に検出した続きであり、長さ18.7m、幅30cm、深さ20～25cmを測り弧状に東西に延びる。東側は削平されており不明である。前回の調査では、柱穴は確認されておらず、溝側面に河原石が組み込まれた状態で検出されている。今回の調査では約40cm間隔でピットが検出され、その周辺には突き込まれた状態で川原石が認められ、柱の根固めとしての使用も考えられることからピットは柱穴と思われる。

溝は西から約8.5mの中央部分で約４m程途切れており、この部分にピットが多数検出され、柱痕跡の認められるピットも認められることから出入口施設等の可能性もある。

土壙墓は北東部の東に傾斜する面で26基検出された。プランは楕円形を呈するものが大部分である。長軸方向は北－西17基、北－東９基で北－西方向を示すものが多い。ベンガラを検出したのは３基であり、位置は北西部である。上新城中学校遺跡（Ａ　Ｂ　Ｃ　Ｄ地区）ではこれまで土壙墓が約130基発見されており、その立地は本遺跡を中心に北、東、西に集中しており、本調査地域を中心とした外側に墓域が検出されている。

溝の規模・性格、集落と墓域の関係等解明する課題は多いが、詳細が不明であり、全体の調査が終了する来年度の調査を待って検討したい。

参考文献　（年度順）

1986年　秋田市教育委員会「秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書・地蔵田Ｂ遺跡」

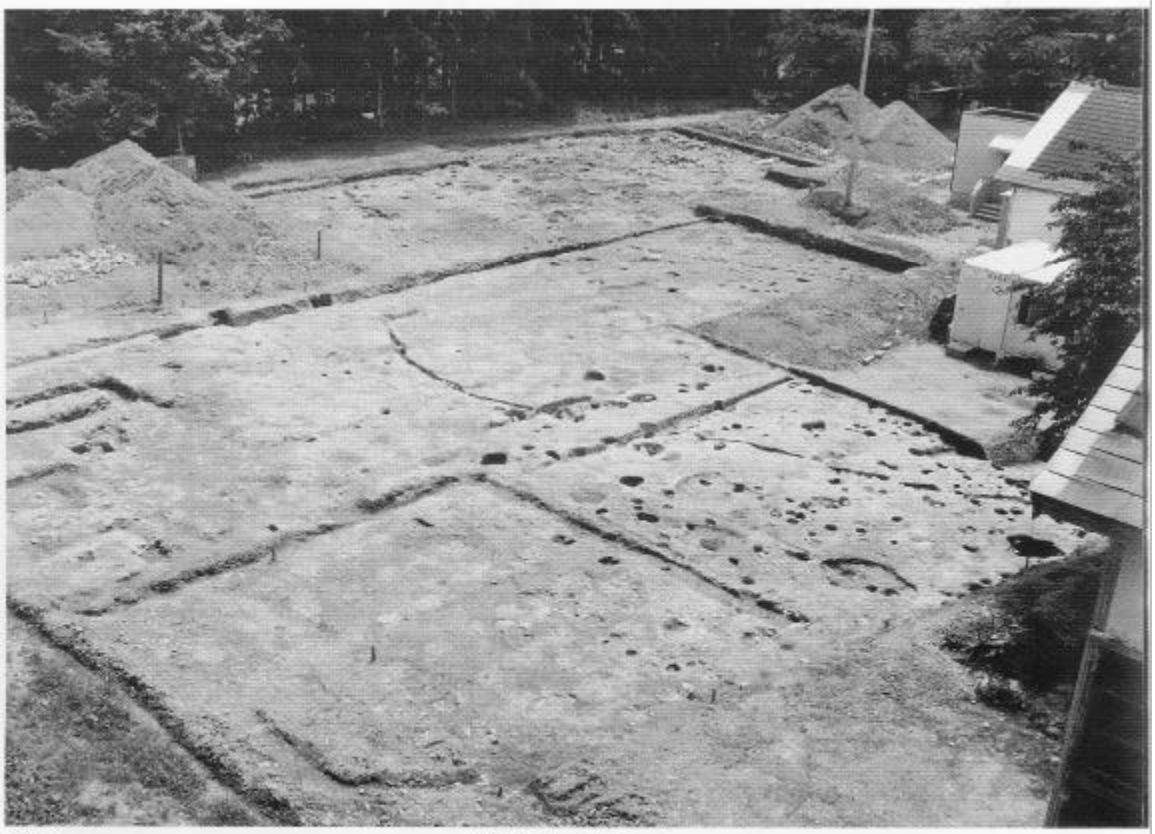
1980年　秋田市産業部 秋田市教育委員会「秋田市上新城中学校遺跡林道工事小グランド造成に伴う緊急発掘調査報告書」

1989年　秋田市教育委員会「秋田市上新城中学校遺跡、学校改築に伴う緊急発掘調査概報」

校舎基礎
水道管
旧体育館基礎
校舎基礎
36.40m
36.20m
1号土坑
1号溝跡
2号土坑
水道管
3号土坑
35.80m
旧体育館基礎
2号溝跡
35.60m
旧体育館基礎
36.00m
35.80m
35.40m
1 10 1 2
3 4 5 6
7 8 9 10
B A J I H G F E D C B A J I
0 10m

第20図　遺構配置図

遺跡全景（南→）



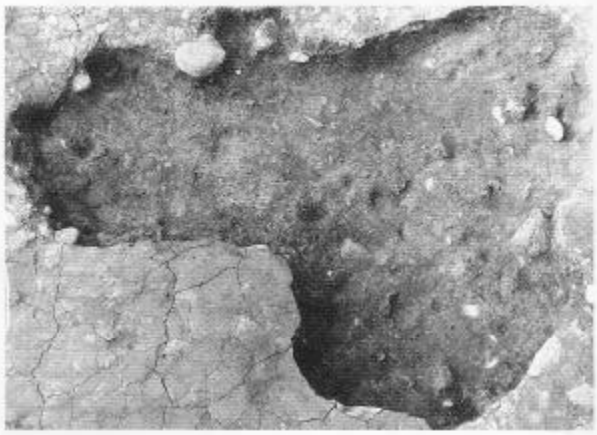
図版 1

遺跡全景（北西→）

左　1号溝とピット群（東→）

下　1号溝とピット群（北→）

図版 2

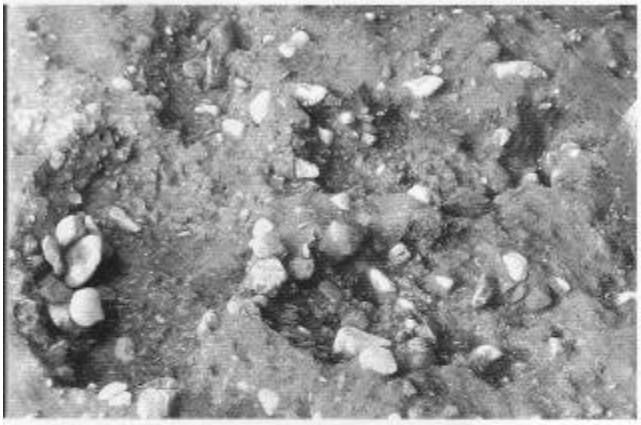


上　土壙墓群

中右　1～3号土壙墓
左　4・5号土壙墓

下　6号土壙墓

図版3

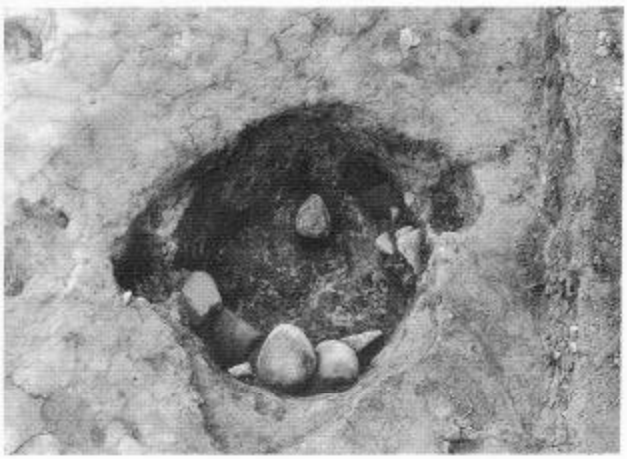


上左　7～11号土壙墓
右　2・6号土壙墓

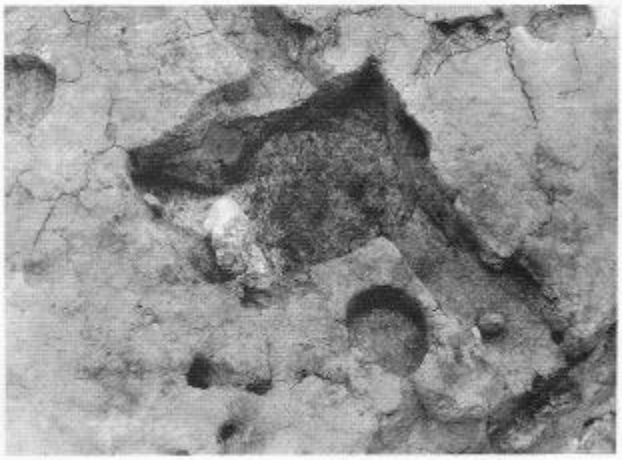
中左　20・21号土壙墓
右　16・18・19号土壙墓

下　22～25号土壙墓

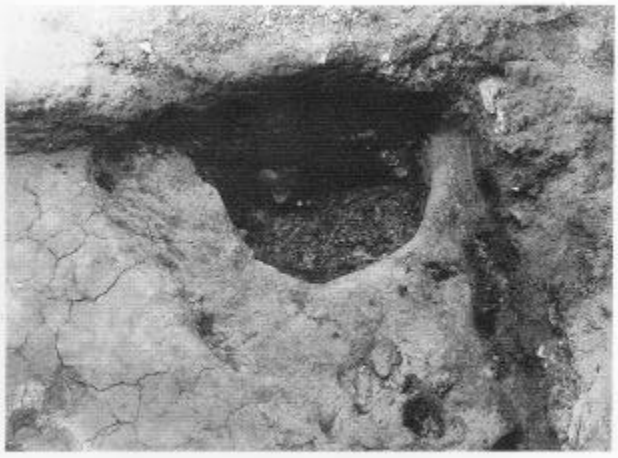
図版 4



1号土壙



2号土壙



3号土壙

図版 5

1

2

3

4 5 6

7 8 9

10

11

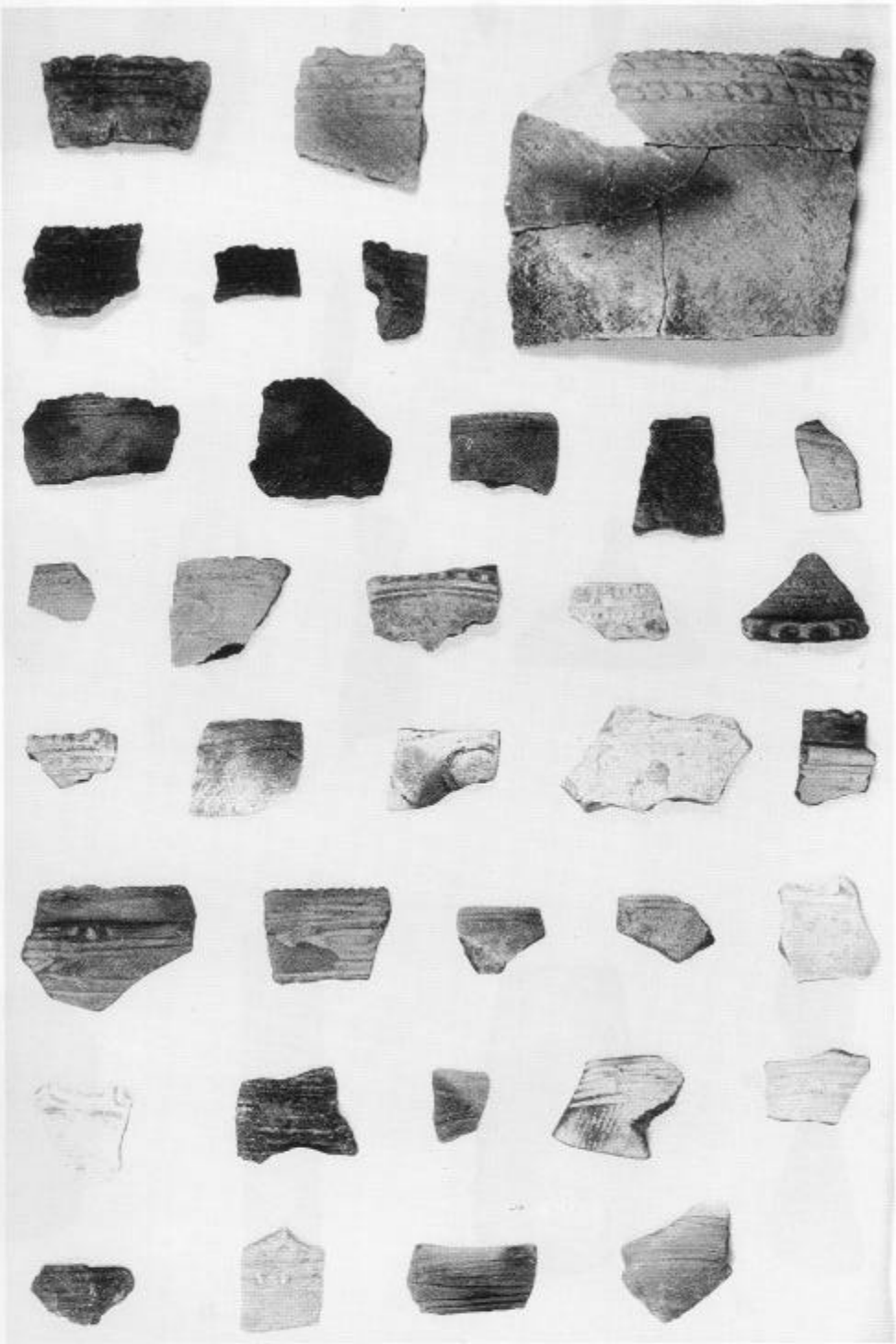
12

13

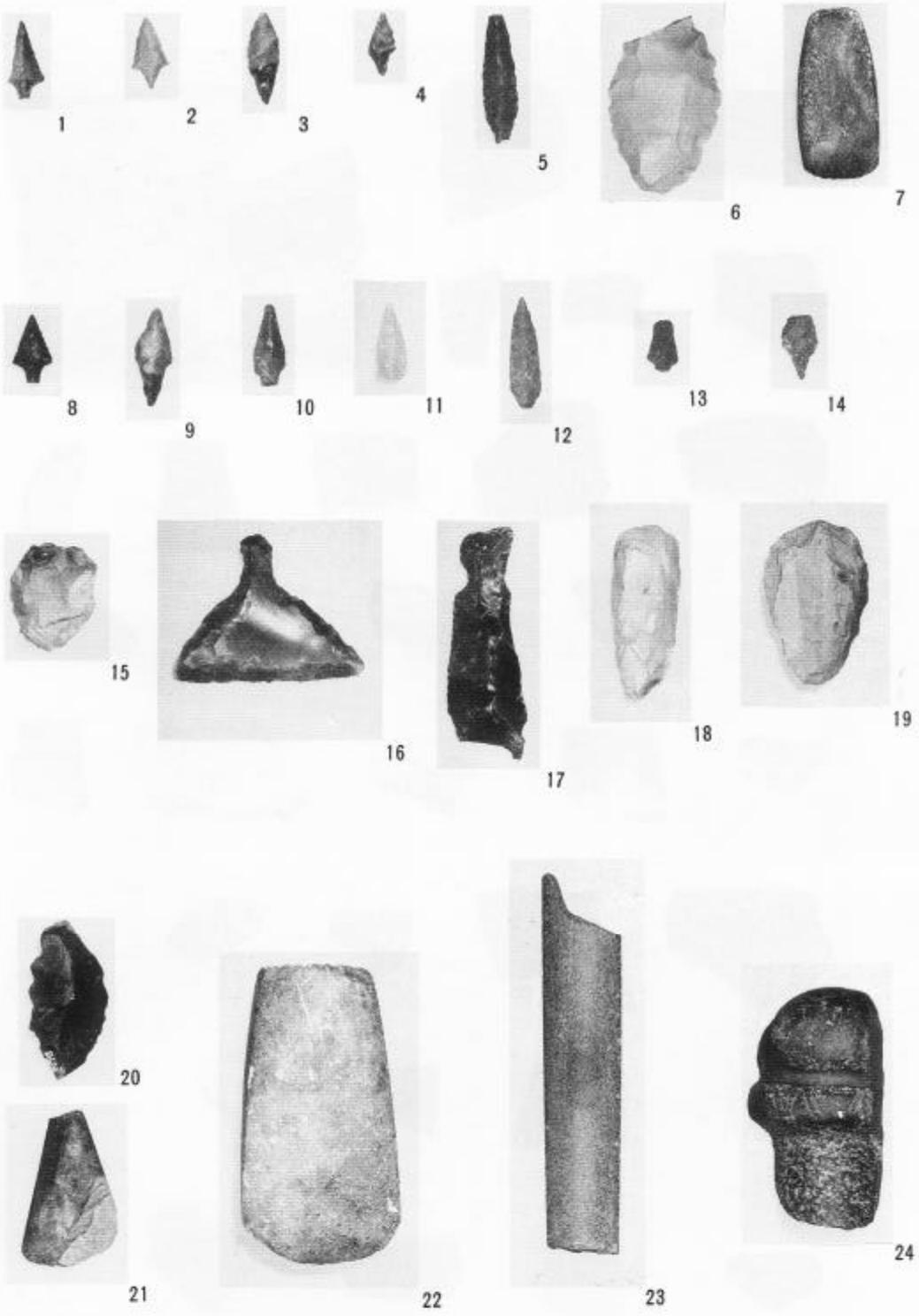
14

図版 6

1・4～10・ピット内出土土器
2・3　遺構外出土土器
11～14　遺構外出土土製品



図版 7　遺構外出土土器



図版 8

1～7遺構内出土石器
15～22遺構外出土石器
23・24遺構外出土石製品

秋田市
上新城中学校遺跡
－学校改築に伴う緊急発掘調査概報－

平成３年３月

発行　秋田市教育委員会

印刷　秋田マイクロ写真印刷(株)